

平成十九年度教化学研究集会

## 寺院と防災

——もし地震がおこったら——

石原 顕 正

お題目一唱お願い致します。南無妙法蓮華經。

ただ今ご紹介をいただきました石原です。最近、いろいろな場所に呼ばれる機会が多くなりました。本日は東京東部管内各聖の前で、このような機会を与えていただきまして大変感謝をしております。東京東部には多くの御縁がございます。高佐宣長上人を始め、大先輩の石川修道上人。山口裕光上人とは、神戸以来の救援仲間でございます。また持田貫信上人には、二〇〇一年神戸での七回忌市民追悼式開催にあたり、公私ともにご支援を賜わり、以来、宗務院に於いて「日蓮宗ボランティアネットワーク・ロータス研修」を毎年開催し、多くの教師の方々への研修の機会を提供していただいております。また昨年は崎津寛光上人を先頭に、東部日青の皆さんが中越沖地震の被災地現場で活動しているお姿を拝見し、皆さんの迅速な行動に意識の高さを感じております。

現代宗教研究所関係者として、手前味噌でございますが、昨日、日蓮宗宗務院におきまして第十八回法華経・日蓮聖人・日蓮教団論研究セミナーが開催されました。今回のテーマは、本年の十二月一日に正式に新法として施行される「公益法人法」でした。公益法人改革もさまざまな議論を重ね、いよいよ現実化されてまいりました。今までは、まあなんとかなるだろうとか、何か言ってきたらそれなりにやればいい、という認識でございましたが、昨日、東京大

学教授島菌進先生及び日蓮宗顧問弁護士長谷川正浩先生の講演を伺い、昨日の資料を持参しました。講演中、宗教法人を含む宗教という立場の公益性の実質的内容として、宗教的使命感を挙げられました。我々が現代社会において公益性とは何かということを問われた場合、その具体的例として、日蓮宗が長い間宗門運動として掲げきた立正平和運動をはじめ、海外支援、国際協力、同和運動、人権活動、災害救助活動等をお二人の先生がお示しになられました。とかく今まで、災害を含む社会でのさまざまな諸問題に対して、我々教師の社会活動は、できる人がやればいいんじゃないかという風潮でした。しかし、こうやって公益性の問題の中で具体例として出てきますと、過去の歴史的な認識も含め、日蓮教学の近代化を考える上でも改めて教義を再学し、事実認識を明らかにした上で、我々の行動認識、行動規範を考えていかなければならないことが示唆されております。

考えてみると、この東部管内は、八十年前の関東大震災による被災、六十年前の大戦による空襲等により街は灰燼に帰しました。壊滅的打撃を受けながらも、先人の努力により大きな復興を遂げた貴重な体験を持ち合わせている地域であります。こうした経験は、過去に一度も被害に遭ったことのない地域と違い、皆さんの危機に対する認識は、先代はじめ古から色々な形で話を聞き、その復興の苦労は身に沁みてお分かりではないかと思えます。大事故が起こる、或いは大きな災害が起こる、また、時代によっては戦争があったわけです。その危機への対応の在り方を考える時、まず、その時代の社会の本質が見えてきます。

一九二三年九月一日関東大震災発生。当時の日本社会は軍国主義による国家体制でした。中でも警察が多くの下町の人達を本所の被服廠跡へ誘導したことによって、記録には約四万人が焼死したとあります。東京都内全体の死者が六万人、実に約三万人がこの管内を中心にくくなりました。これは今流に言いますと、「エキスパートエラー」を引き起こしたといえるのではないのでしょうか。

予想をはるかに超えた大惨事。すべての機能が麻痺し、冷静な判断が不可能となり、誤った誘導の結果がより多く

の犠牲を出し、被害を拡大させる結果となりました。さらに、朝鮮人來襲という「流言飛語」が広がり、都心に五万人の軍隊が出勤する事態になり、自然の猛威に加え、市民の自由も奪われました。マグニチュード七・九という大地震は自然がもたらしたのですが、橋が焼け落ち、家が類焼していく地震火災に弱い下町を作ったのは人間でした。天災、人災が絡み合う危機的状況において、国家権力の無制限の極大化、住民の思考停止、わずかな不安で拡大する残酷性、責任を問わない無反省な社会が露呈しました。

その後も多くの大災害発生の度に悲惨な状況の強調と復興の掛け声だけが騒がしく、それは今日も変わっていないように思えます。それぞれの災害への総合的調査や究明が行われる事は少なく、ハード面のみでの復興に話が終始してしまい、災害の中での人々の行動については、時が経つにつれ記憶から消されていきます。

関東大震災から約五十年経った一九七五年に、清水幾太郎が体験記を編集し、『手記・関東大震災』を出版しています。著者は「明日に迫ったこの国難」と題し、劫火をさまよう者の無力感と恐怖の体験を克明に残しています。

そのうち私は空き地を出て歩き始めました。誰かが歩き始めたらみんなぞろぞろと歩き出しただけで、誰も行き先があるわけはありません。亀戸天神に近づく頃、避難者の群れは大きく膨れ上がって、私達は道幅いっぱい長い行列になって、のろのろと流れて行きました。みんな黙っています。しかし時々、行列の中から見失った家族の名を呼ぶ叫び声があります。私達も思い出したように、家族の名前を呼びました。けれどもあの空き地にいた時、柳島尋常小学校の子供達はみんなが焼け死んでしまったと誰かが言いましたので、もう諦めましたと書いてあります。感情が鈍くなっていたのでしょうか、悲しみを鋭く感じ取ることもなく、自分というものの全体が悲しみであるような気分でした。家族の名前を呼ぶ声が途絶えたと、行列の中から時々、ウオーという大きなうめき声のようなものが起ります。それを聞くと私の身体の奥から、思わず、ウオーといううめき声が出てしまいます。その夜は、東武鉄道の線路の枕木に座って燃え続ける東京の真っ赤な空を、朝方までぼんやりと眺めていました。

当時の社会は、今とは全く違っておりました。現在のような社会での支援システムもマニュアルありません。行く所はどこもなく、どこへ行こうかという目標もなく、全くお手上げの状態だということがよく分かります。

市民にとって自然の猛威によってすべてを奪われ、たとえ生き残ったとしても、支援や自立への手立てもなく、自己完結によって生き続けなければなりませんでした。

今日の資料にありますように、私自身の阪神・淡路大震災での体験がアースの活動の大きなきっかけとなったことは、周知の通りであります。それは地震発生直後の私自身の体験が、余りにも衝撃的であったということです。「行ってみたい」、「やってみよう」とにかく野次馬の如く神戸に向かい、散々な目に遭いました。それは、私自身が未だかつて経験したことのないほどの現実を目の当たりにしたことから始まっています。私達は僧侶として、日頃から法務の場において人間の「死」という現実と向き合い、多くの悲しみや無常観を共に感じているはずでした。しかし、前に引用した清水幾太郎の文章のように、被災地神戸にたどり着いたとたん、どこへ行くともあてもなく歩いている人々を実際に目にした時、日常の法務とはまったく異なる異様な事態。目の前の状況が現実として受け入れられない。何故こんなことになってしまったのかという強い思いから、悲惨な事態に遭遇している大勢の人達を前に、ただ涙があふれ止まりませんでした。何故多くの人々がこのような目に遭わなければならないのかと。悲しみと同時に怒りが噴出してきました。「何か役に立ちたい」と思い立って神戸に来たはずなのに、まだこの時点では、何かをしなればという気持ちにはなれませんでした。このような悲惨な場面に身を投じながら、一人の人間が非力であるということを痛感していました。

阪神・淡路大震災が起こった一九九五年、日本は世界第二位の経済大国と言われるほど、その国力を誇っていました。目覚ましい経済発展をとげ、順風満帆の日本社会だったわけです。突然の大地震の発生は、青天の霹靂というか、近代都市が一瞬にして崩壊をするという現実を味わいました。のべ一三〇万人が神戸に向かったといわれました。被

災した親戚、知人等を見舞う人々は深刻な表情でしたが、なかには興味本位で被災地を訪れる人々。(私も野次馬根性丸出しでしたが……)被災地へあたかも観光に来ているように、支援に参加することもなく、多くの現場で写真撮影に終始する人々をみかけましたが、これが本当に日本の社会の反応だとしたら大変悲しいことです。

大きな地震による揺れは人間社会に被害を与えました。多くの尊い命を奪い、多くの人々を傷つけました。支援を必要としている人々。何か手助けになることで支援しようとしている人々。当時全国で、「災害救援ボランティア」という活字が飛び交いました。救援活動とはいえ、突然の事態にすべて有効に対処できるはずがありません。現場では慣れない事態に誰もが、試行錯誤の連続でした。なによりも急を要するのは、せつかく生き残った命を生かすことが最大事でありました。

現実的には、当時の日本社会における「ボランティア精神」は、すべて個人の自発的意思であり、余暇を利用しての「短期型一方的支援」は混乱を招きました。

まず、私が最初に気づいたことは個人の都合・時間です。何かやってみたい。支援に参加してみたいがどうすればいいのか。そんな時、一人の人間には限られた体力と時間しかありません。それまで、さまざまな場所で悪戦苦闘の日々は何の進展にもつながらなかった。つまり、目の前の現実を改善する程度の余裕しか持てなかったのです。幸い人間社会には多くの善意があった。これまで個人的参加が中心であった個人の提供できる都合・時間をつなぎ合わせることに、ある程度まとまった長期的な支援が可能になります。さまざまな情報を発信し、支援をこころざす大勢の人々の受け皿的ネットワークを構築し、さまざまな支援を一本化することによって体系化された支援活動を可能にする市民参加型の「ボランティアネットワーク・アース」を立ち上げました。こうして実際の現場では今何が起きているのか、今、何が一番必要なのか、めまぐるしく移り変わるニーズを被災地社会の外に情報として出すこと、知らせることによって、適時有効な物資・人材を確保することができました。それまで市民社会からの支援は「モノ・

カネ」を届けることが中心でしたが、それだけではなく、そこに送る人の気持ちを添えること。ともに居合わせることから被災地の人々が何を望んでいるのか、或いはその気持ちを汲み取ることに。その三つが可能になり、初めて被災地の人々と今日まで十数年間、信頼の絆、交流をはかることができたのではないかと思っています。

昨年、明治大学で、二〇〇〇年三宅島噴火災害の折、全島民避難の指揮を執られた、当時の東京都青山副知事に噴火から全島避難に至る経緯、決断への様子を改めて伺う機会を得ました。青山氏はかつて「日本のボランティアは自分がやろうという自発性だけが頼りでした。しかし、これからは継続性と責任性が問われる。社会は今まで、やりた人が自分の気持ちでやったのだから『その中身』は問うことはできないという考え方をしていたが、これからは、継続・責任を重視すること。どれだけ頼りになるのか。活動が有効に機能したのか成果が問われるであろう」と指摘されました。

近年、日本中いたるところで日常的に地震は発生していますが、被災地以外の社会では何が起こっても、自分自身が危ない目に遭わない限り、全て他人事なのです。未だに多くの人達が自分にはあり得ないこと、或いは、自分だけは死なないと思っっているのです。防災は、未だにその時に考えればいいと先送りをされた考えが先行しています。これまで日本では、地震に関してある種専門家集団、いわゆる研究者に委ねられていて、そこからの情報だけが頼りでした。地震をはじめとする災害に対する市民の意識は、リアリティがある問題として捉えられず、危険認識というものが全く育っていなかったのです。

例えば、九月一日は今までは関東大震災の記念日だったのですが、いつの間にか「防災の日」になりました。何が変わるかといえは、スーパーなどの店頭で防災コーナーがにわかに登場します。食糧や水をはじめとしたあらゆる防災グッズが出現するのです。おそらくこの機会に大勢の人が気軽に買われることでしょう。しかし、せっかく購入した防災用品も、しばらくは家庭内で目にするものがあっても、しだいにどこかに置き忘れたり、しまい込んでしま

ことが現実ではないでしょうか。これが日本社会での災害に対する一般的意識。「自分自身にはあり得ないこと」、「自分には関わりがないだろう」と思っている防災意識のひとつの現れと考えられます。

さらに、現代社会は自然災害だけではなく様々な危機に瀕しています。危機とは「全く予測不能な事態」と定義されています。人間は過去の経験や実際の体験などを前例として、自分の記憶の中に刷り込んでおきますから、ある程度予測や行動認識がはたります。しかし、全く予測が不能となると、危機による衝撃は計り知れません。それだけ被害も大きくなります。生命・財産に関わったり、或いは組織の名誉、存続に重大な影響を及ぼすことになりかねないのです。特に最近では、不正、改ざん、偽装などの事案が多くみられ、会社が存続できなくなる例もたくさんあります。食肉の偽装をした会社は社会的信用を失い、組織そのもの立ち行かなくなり無くなってしまう例もたくさんあります。

しかし、一方では赤福さんのように、営業再会当日、朝五時から長蛇の列をなして買いにきてくれるお客さんがいるケースもありました。一ヶ月前まではメディアを先頭に世間で大騒ぎをして、昨日まで赤福は悪いの候と言っていた人たちが、喉元乾かぬうちに殺到している姿を見ると、これは日本人の危機に対する認識の甘さを感じました。

近年、その発生が懸念されている首都直下型の地震について触れてみたいと思います。現在この大地震が首都圏で起きたとすると、約一二兆円もの経済的被害が出るだろうと推定されています。いまこの資料に示した指数は、世界大都市の自然災害のリスク指数です。災害の発生確率、建物などの安全性、経済面などのデータから都市ごとの災害リスクをはじめ出した数字です。平成十五年の資料ですが、世界中のワースト・ワンが東京・横浜の七一〇です。先程の話にありましたアメリカ西海岸・サンフランシスコが一六七ですから、日本の首都圏のリスク指数が約四倍近く高いということです。大震災を経験した関西圏、大阪・神戸・京都は九二で四位に続く。ロンドン三〇。今年オランダが開催される中国の北京は一五。今までのデータからすると、日本の大都市の格付けリスク指数は異常に高く、予想される災害規模は余りにも膨大であるということを示唆しています。

一九九四年から二〇〇三年にかけて起こったマグニチュード六以上の世界の地震回数は、約九六〇回といわれています。その約二二〇回、二二・九%が日本で起きているのです。地理的、構造的条件に加えて、台風、豪雨、或いは噴火災害等、日本は非常にリスクが高く、世界の投資マネー業界では、日本に投資することは大きなリスクを伴うと警戒感をもっています。日本の面積は世界の約〇・二五%に過ぎませんが、自然災害による死者の数は世界の約〇・五%、災害被害は一六%。ですから亡くなる人も多いということです。

この十年、国や自治体も法的整備、防災組織の強化、防災情報システム構築、マニュアルの作成、或いは実質的な防災訓練の実施に取り組んできました。しかし、行政の取り組みには限度があります。やはり災害対策は一人一人の単位で取り組む「自助」が一番であり、我が身の安全が確保されてこそ、家族や地域での「共助」として行政からの支援もあるわけです。今や防災は訓練ではなく日常生活において現実化しています。日々凶悪化する凄惨な事件の増加、いっどこで、不意に我が身が危険にさらされるか分からない現実、改善の手立てさえ見つかからない現状です。私たちはもう一度、これまでの意識を洗練する必要があります。新たな防災意識のモデルを構築しながら、減災に努力する社会作りが不可欠とされます。過去の我々の災害観というものが、いかに低いレベルのものであるか考えていただきたいと思います。

次に、今日の資料をご覧下さい。今、社会で起こっている危機―「不測の事態」は、まさに個人から地球レベルまで広い範囲に及んでいます。人の死傷に関わる事態、物的損害、財産喪失、組織の打撃等六つのカテゴリーに分類できます。組織内の経営（労働争議・労働災害）、組織外との関係（商品の欠陥スキャンダル）、産業災害（爆発・火災・危険物流出）、自然災害（地震・台風・水害・噴火）、犯罪（テロ・脅迫・誘拐）、理由なき無差別殺人、その他（戦争等国際問題）等色々出てきます。食の問題（食の安全）、産業災害、これはまさに今問題になっています。原発の問題、或いは原発そのものではなく、地震に起因し原発が被害を受けるといふ危険が出てくるのです。テロの脅威

は九・一一以降、世界中が危機意識を高めました。これら犯罪、戦争等の国際的な問題も全て地球環境から個人の問題まで含むこととなります。

これらの事態に当然、リスクが出てきます。しかし、目に見えるリスクはいいのですが、私たちが便利で豊かな生活を享受している裏側で、知らずに不都合なことが進行していることがあるのです。科学や技術の進歩によって産業は急速に発展する、一方では環境汚染や地球温暖化という問題を発生させています。或いは、情報化社会の進歩は、一方で情報漏洩やネット犯罪が発生するリスクを負わなければならないというマイナス要素が生み出されていることとなります。このように私たちの日常生活は、直接、間接を問わずさまざまに危機にさらされています。そのためには、日頃からの備えが肝心であり、もしも危機が迫った時、その影響が最小限に抑えられるよう日頃から準備をしておくことです。まず、身近な安全や安心を守るための危機管理が必要です。

ここで実際に、「危機管理」という用語が出てきました。危機は時として連鎖して人類を、人間社会を襲ってきます。事例によっては深刻な事態にずっと突き進んでいるのだ、地球自体がすでに病んでいるのだという人もいます。我々が生きているうちは無事であればいいなどという話はもう通用しないのです。下手をすると自分たちの子供、孫の時代まで普通の状態で人類が快適に生活できるかどうか、危うくなってきているのです。九・一一以降に、危機管理という言葉が頻繁に使われるようになりました。しかし、日本社会での認識は、欧米と何十年もの隔たりがあります。これは島国という特殊な環境と、長い間の鎖国も含めて、日本民族という単一民族国家であったことも影響していると思われるが、いずれにしても危機に対して先行的でなく後追いの対処が多くみられます。

危機管理はクライシスマネジメントとも呼ばれております。リスクマネジメントという言葉が企業等でも使われていますが、いずれも日本語では危険管理と訳されており、では、危機管理とリスクマネジメントはどう違うのかと言うと、その区別はありません。このクライシスという言葉が登場してきたのは、一九六二年にアメリカで起き

たキューバ危機がきっかけになったといわれています。当時の米ソ冷戦状態にあつてソ連がキューバへ核弾頭のついたミサイルを持ち込み、いつでもボタン一つで核戦争ができるという緊迫した状態になりました。その時にはじめてアメリカで危機管理という用語が登場してきたと思われまゝ。そして、一九七一年にアメリカ大統領府の中に、危機管理システムが登場してきました。以来、世界的な危機と言われているものは我々の記憶の中にあるように、まず一九七四年に石油危機がありました。オイルショックです。九〇年から九一年に勃発した湾岸戦争。国内では九五年に阪神・淡路大震災。二年後の九七年に金融危機が一度来ています。世界的な同時株安。そして、二〇〇一年アメリカの同時多発テロ等。このような事態に日本でもマスコミを中心に、危機管理という言葉が定着しました。危機管理もリスクマネジメントもリスクを予防回避、被害を最小限に食い止めるという概念では同じです。あえて区別するならば、リスクマネジメントはリスク一般を対象にし、危機管理はリスクの中の異常性の高い巨大災害、持続性の強い偶発事故、政治的或いは社会的難局を対象とするのです。危機管理とは家計、企業或いは行政が難局に直面した場合の、決断・指揮・命令・実行の総体と考えられます。初代の内閣安全保障室長、佐々淳行氏は、

「危機管理は予測が不能」であるのに対し、リスクマネジメントでは「予測が可能、先例・前例が存在する」としているが、リスクマネジメントの場合でも、先例、前例・予測だけを重視しているのではなく、常にリスクに対して、予防・回避し、万一、災害が生じた際に発生する被害をいかに少なくすることが、リスクマネジメントの考え方である。危機管理も同様に、リスク（クライシス）を予防・回避し、損害を少なくすることです。と述べています。

日本で危機管理が多用化されたのはバブル経済が崩壊し、相次ぐ企業倒産や住宅ローンによる金融危機により銀行が倒産をした頃です。九五年、阪神での災害発生と同時に、地下鉄サリン事件が起きています。東海村では臨界事故が起きました。雪印乳業の偽装事件。狂牛病等々。さらには公務員の不祥事が続きました。日本が国際テロの標的に

なるのではないかと一氣に不安が増大したことに起因し、時を同じくして国民保護法等の有事立法が成立をしていくわけです。このように国家・個人レベルでも、危機管理という言葉が多用される事態が余りにも多くなってきています。特に企業活動に伴うリスクの例としては、ライブドア事件でしょう。企業防衛の観点から、盛んにリスクマネジメントということが取り入れられました。しかしそれだけ社会の関心は高まっている一方で、行政的にはあまり関心を示すことはなかったのです。

というのは、最近まで、日本は国際間の緊張・国内治安・経済活動にも緊迫した諸問題も見られず、高度成長、経済発展により比較的安定した社会であったからではないでしょうか。しかしバブル経済崩壊一九九一年以降、急激にリスクの多い社会情勢に移行し、テロや大規模災害が頻発するようになりました。国・地方公共団体をはじめ警察・消防・自衛隊等災害活動機関は、国民全体の安全を守るために危機管理やリスク管理を重視する時代になりました。

「危機管理」とは「リスク・危険を、予防・回避することであり、起こりうる被害・損害をいかに少なくするか」にあります。しかし、どのように予防・回避し損害を少なくするかとなると、国・自治体をはじめ、依然として具体的なノウハウを持ち合わせるところは少ないようです。ようやく総理官邸や各省庁はじめ、地方行政の中で「危機〇〇」という組織名称が見られるようになりましたが、欧米のそれと比較すると本来の組織のあるべき姿からは程遠い現状です。組織があっても、組織的情報収集能力や意思決定についての実戦では数十年の遅れがあるといわれています。さまざまに原因が考えられますが「危機管理」に対する認識の違いは大きいと思われまます。依然として日本社会では危機管理が立ち遅れていることだけは、認識していただきたいと思えます。

現代は「個人の災害の時代」に入ってきたという表現がされています。確かに、我々は豊かで便利な生活の営みを手に入れ頼りすぎた、過信をしていたようです。日本は非常に安全で、豊かな国だという安全神話が崩壊してしまっただけのことです。危機管理の不足が露呈し、依存心の高まり、何かが起こったら誰かが助けてくれる、自分たちが

何かをしようという意識が非常に低くなり、自分にはあり得ないという意識だけが強まる。災害が起こると被害者が出る。それはあくまで社会全体のことではなく、個人の不幸として、個人一人ひとりのリスクとして捉えられて置き去りにされていく傾向にあるのではないかと考えられます。

一方、最近の災害報道体制について、今日の新聞、テレビは「報道する恐竜」とも表現されています。「報道する恐竜」というのは、阪神での震災報道での日本メディアの大量報道を表現したものです。それは現場に大挙して押しかけ、世間の関心が続く限り休むことなく、すべてを報道しようとする報道スタイルを、アメリカではバックジャーナリズムといわれています。

大量報道、リアルタイムで送られてくる映像―それを視続けている私たち外部社会は、まるでその場に居合わせたような錯覚に陥り、茶の間はたちまち国民総評論家状態になってしまうのです。被災によって本当に悲しみにうちひしがれ、無反応な人ほど画面からこぼれ落ち、決して映像には登場しないことを知る由もありませんでした。当惑や無言、無反応こそ、被災者一人ひとりの悲しみや困難と付き合う糸口が潜んでいたはずなのに、それを聞き取る手立ても、想像力ありませんでした。こんな事態に直面したとき、宗教者としてなすべきことは、まず被災者の悲しみや困難、現状を汲み取ることが、社会から宗教に求められていることではないでしょうか。

大災害が起きた被災地での被災者は、生き残った人と肉親を喪った遺族という二つの立場に分かれます。災害によって目の前で起こった家族・身内の突然の死。それは生き埋め、家の下敷き、火災による焼死の場合が多くみられます。これは異常であり、なすすべもなく生き残った人にとっては、信じがたい現実であり、到底受け入れられる精神状態ではありません。

災害直後、または肉親の死を見届けた直後、精神は不安定であり、やり場のない怒りと同時に助けられなかった自分への罪悪感が生じてくる。多くの場合、自分自身がこのまま生き続けることをとても辛く感じます。自分だけが生

き残ってこんな思いをするのだったら、いつそ生きていないほうがいい、と自殺するケース。その他多くの人々は、自ら生きることへの思いを放棄してしまうのです。このような現実には直面した時、せつかく助かった人々への精神的ケアを、私たちが一番にやらなければいけないと思います。

昨年の能登地震も中越沖地震もそうなのですが、発災と同時に現地は被災地となり、多くの支援者やマスコミが押し寄せ混乱状態になります。大量報道により、明けても暮れても同じような画面を放映することによって、現場に行かなくても誰もがあたかも災害に遭遇したような錯覚に陥るのです。行方不明者の捜索、身体的救助と物質的援助は過剰なまでに映像化される。

外部社会からは、大量物資が投入され、救援という名目で一方的な行為が行われる。被災者の立場ではなく外側からの一方的な行為は、ファシズムさえ感じましたものです。個人の実情や課題は全てかき消され、取り残されていく被災者はますます可哀想で哀れなイメージを背負い、大量に送り込まれる物資を与え続けられ、ただ無力感で一杯になります。心の傷を癒す暇もなく、次第に被災者一人ひとりの不幸はこぼれ落ち、孤立し絶望する人は自殺やアルコール依存症になる人。或いは、僅かな生活費を切り詰めるため、食べられずに栄養失調で亡くなった人もいます。

これらの事実は、神戸の避難所や仮設住宅で体験しました。しかし、時間の経過とともに、仮設は解消され、その実態は被災者や身近な関係者以外、まったく知るよしもありません。被災してやむなく避難して来た人々は被災者「マス」として集団で扱われ、個人の扱いはありません。かつての収容所ではありませんが、避難者は可哀想な人だという一つのマスで括られている状態でした。

中越沖地震の折、柏崎市内の体育館でとんでもない人に会いました。その男性老人の自宅は住めないくらい被害を受け、自主的にこの体育館に避難していました。「俺は独り暮らしで、震災から三、四日経ったが着る物もねえ」と。取り急ぎスタッフが着替えを買いに走りました。この間、時間をかけてこちらの身分や目的を話し、老人の状況

を克明に聞き取ることができました。「神さま、仏さまだ」と言って大変喜んでいただきました。

その日は初期調査の段階であり、再会を約束し、とりあえず他に移動しました。数日後の支援活動中、再びその老人を訪ねたところ不在のため、体育館入口の避難所受付で担当職員に居所を尋ねてみると、その老人の記録がなく、ここには存在しないと。しかし、確かに体育館の中にはいるようだが、何の登録もされていないので、存在しない人になっていたのです。自衛隊の炊き出しは貰っている。これはおかしいだろうと言うと、行政担当者は、この避難所を立ち上げる以前の記録はありませんと言うのです。地震発生から行政が避難所を立ち上げる以前に、体育館を一般の避難場所として自主的に避難してきた人のデータは無いのです。行政は、それら以前にいた人の聞き取りを全く行いません。自分達が来てから始めたことに対してはいろんな情報を持っていますが、それ以前のものを持っていません。これはまさに日頃の行政体質と同じです。調べようとしない。一緒にそこにいるから食事時には食事が提供されますが、手紙や情報の出入りが全くない。これこそが取り残された被災者だと実態を目の当たりにしました。

このようにしてさまざまに災害の検証と被災者としての立場を明らかにしてきましたが、改めて宗教者としての役割について触れてみましょう。一番大事なことは世間的な求めによる救済方法でいいのかという疑問もっています。皆さんはどのようにお考えでしょうか。被災地支援としての行政や社会のマニユアルを補完することが、宗教的救済と言えるのかということです。それは痛手を受け苦しむ人々の気持ちや内面的な救いではないのではないのでしょうか。それならば、自分たちが被災者と向き合える宗教的ステージを確立していく必要があるのではないかと、失敗や批判は恐れずにまず行動を起こしてみたらいかがでしょうか。

一二五四年から一二七一年の約二十年間、宗祖も鎌倉にお住まいになられております。災害時の人間行動の視点から見ると、宗祖も一人の罹災者として災害を共受されたでしょう。危機に直面した時、同じ鎌倉の住人として危機を共有し連帯感をもたれたことでしょう。

大地震、大風・大飢饉・大疫病等が頻発している。当時の政府のおかれた鎌倉の人口が約十万人。『吾妻鏡』には「大地震、音あり、神社・仏閣一字として全きはなし」とあります。正嘉元年八月二十三日に前代に越えたる地震。戌亥の刻ですから現在の午後八時から午後十一時と推定されます。いずれにしても暗闇です。北緯三十五度、東経一三九度五〇分であるなら、現代では関東南部大地震だったと推定されます。正嘉の地震は、現在の関東一円がマグニチュード約七から七・五、鎌倉においても震度七程の揺れがあったと思われれます。『吾妻鏡』には、全ての山は崩れ、人家は崩れ、地が裂けて水が湧き、燃えだした火炎が青白かったと。現代に生きる私たちでも想像を絶する状態です。当時は地震に対する科学的知識や災害情報もありません。目の前に見えるその現実を、まさに地獄だったでしょう。宗祖も『安国論御勸出来』に「悪鬼跳梁」とお書きになっておられる。現代は科学万能の時代でありますけれども、当時としては宗祖自身も大変な恐怖を経験されたであろう。「万民既に大半を超えて死を招き了んぬ」からは、目の前の人は殆ど死に至り、或いは傷付き、まともな状態ではなかったと思われれます。宗祖が名越に居ながらにして、度重なる危機・災害を体験され、ご自身が被災者になられています。名越の地は鎌倉に出入りをする当時の要害の地でありましたが、葬地とも伝えられています。それらから想像するに、多くの身内の死体を担ぎ運ぶ人の哀れを宗祖は連日ご覧になったであろうと思います。同じ恐怖、目線で、自らも同じ立場で苦しむことによって他者の苦しみに共感し、その苦しみを互いに共有することによって人はひとつにつながる。後に、救済のための「受苦」という考え方に到達します。宗祖自身の怒りから、他の苦しみを宗教者として、自らがかわって受けようとすることにいたったのでしょうか。このように宗祖の出発もまた、頻発した災害により自ら苦しみの中にあり、人々との苦しみを共感共有するものであったと拝察されます。

災害の目撃者・罹災者としての宗祖は、当然、怒りと悲しみを強くされ、この思いが強くなればなるほどその災害興起の原因究明に到達します。悪鬼の跳梁、善神退去、災難興起が災害の続出につながっていくという災害観を確立

されています。これは邪教と言われる浄土の教えにも見られますが、正法である法華経を勧奨した宗祖の立場とすれば、当然この疑惑と怒りが当時の行政国家に向けられ、国家観が出てきます。仏教者として多くの災害問題を受け止め、その原因の回答をご自身の中に求め、一切経閲読への大きな一歩とされています。

自然災害や日々の不安への解決、個人の喜びや悲しみは、社会、国家の安穩なくしてはありえないという思いを、災害罹災者として宗祖は強く感じられたことでしょう。どうして災害はこのように続出するのか。災害によって社会も人も傷つき、その多くは再び元に戻らない。災害の起こらない社会はどうか。成仏の直道である法華経は、個人の成仏はできてもこのような災害による大量死の前に、佛国土は築けないのか。一方、この事態に何の有効な手立てでもなしえない為政者、既成仏教への疑念と怒りが増す。またご自身のなかでも根本的解決に向けて自問自答されておられます。

現代においても、被災者という「マス」で集団的に扱うことが、当事者にとってどんなに辛いことか。このままでは日本社会の災害時の思想は貧しい社会といえるのではないのでしょうか。「やさしさのかけらもない」と言われるように、すべてが現状の事態を改善、回復することに終始している。都市は再生され町並みは塗り替えられ、時間が経過しても一人ひとりの困難や心の叫びは奥に押し込められ、表に表れることもなく気づく人もいない。すべてが傷つき、人も社会も全てが信じられない不安な状態の中で、当事者はただ受け入れるしかありません。私たちが求められる「最高の贈り物」は、多くを失った人々にせめて再び信じる気持ち、社会への信頼が芽生える思いを届けることです。そうしたさまざまな困難、心の叫びに耳を傾けること。私たちは宗教者として、信頼できる人間として寄り添いながら気持ちを伝え、時間をかけて心の内を読み取る手立てを考えるべきではないでしょうか。宗祖のお気持ちをここに置き換えてみましょう。私たち七〇〇年を経た今、同じ実情を前にして宗教者として何をなすべきか。真の救済とは何か。今後の大きな課題といえます。

原状回復への効率重視、形の見えるモノへのこだわりは現代文明の本流と考えざるをえません。そこで、まず宗教的体系化された現実的救済の理念、当事者への「真の癒しと救いの手立て」の実践が確立されなければ、被災者にとって粉々になった現実の秩序を取り戻す意味を理解することにはならないでしょう。一人の人間として被災者と向き合い共に生きるこの意味を求め続けていくことで、皆さんの心の中で「する人」と「される人」の関係が問い直されていくことが肝心であると考えます。

そのためにも本日の研修のテーマである「防災」の視点では、個人からの取り組みが重要です。「うちは大丈夫」、「防災対策は明日考えればいい」という気持ちの蓄積が災害を呼び込むことになるかもしれません。災害を防ぎ被害を最小限にとどめるためには、自分自身や家族の身の安全だけを考えるだけでは充分とはいえません。混乱する現代において、宗祖の即身成仏と仏国土顕現（個人の救済と社会浄化）の教えによって、ケア（癒しと救い）宗教的機能志向実現のための祈りをめざしましょう。

先進国のなかでも最も安全だといわれた神話がいとも簡単に崩れた現在、私たちの身近でも身内、他人を問わず、人間不信は現実の社会問題として計り知れない状況にあります。言い換えれば「他人の不幸の上の繁栄は、やがて自分自身にも影響が及ぶかもしれない」ことを考える必要があるのではないのでしょうか。

私たちアースは、定款による活動とともに現代社会における宗門としての実践活動の一モデルとなれるように、これからも常に社会の中にあつて歩み続けていきたいと思えます。ご清聴ありがとうございました。

## グループワークへ移る

今日は、「テーマー」くらいしか時間的にできないかも知れませんが、先ほど名簿の上で五つのグループに分けてお話をいただき、それぞれにコーディネーターを付けてあります。コーディネーターさんには事前に打ち合わせをして

ありますので、状況付与にもとづいて「衝撃時」に、

まず自分自身がどういう状態になるのか。どんな行動をとるのか。

その時、何ができて、何ができないのか。

と、いうことを明らかにしながら、グループで話し合いをしていただきたいと思います。

資料として状況付与を配布いたします。これは架空のものではなく、東京都防災会議判定会から公表をされている平成十八年最新版の都内各区部の被害想定によるものです。本日使用のデータは、

東京北部地震・冬の夕方風速六メートル、震度七の揺れ

を想定としています。

震度六強以上の揺れの範囲は東京都全体の四九%ですけれども、実はこの東京東部管内の四区について、震度六強以上の揺れの確立は、ほぼ一〇〇%で、大きな被害が全部この管内に関係しています。

大きな揺れの直後の情報として、

ラジオからの情報によれば、東京を中心に大きな揺れにより広範囲にわたる被害。鉄道関係はJ・R・私鉄すべて不通。或いは建物の倒壊、高速道路は橋脚が少なくとも想定で四三五箇所、またターミナル駅でかなりの被害を受けているため利用者で溢れている模様。多数、火災によると思われる煙が確認され、消防・救急車両等のサイレンも聞こえているが、現在こちらの方角には近づいてこない一状況。  
が、想定として、皆さんに示されました。

まず、震度七の揺れから考えると、この区部別想定表でいきますと、墨田区、足立区、葛飾区、江東区は、都内二十三区の中で、建物倒壊、火災発生率等被害想定は桁はずれです。中でも、火災件数の桁が他区部と異なります。

火災による死者、或いは、火災による人的被害の中での負傷者の数、自力脱出困難者数をみますと、高齢者や身体

的に障害のある方が被害に遭われる確立が高い。そこで手立てを考えていく過程として、例えば墨田区を例にすると、昼間人口は現在二十一万五千人、夜間人口が二五万七千人。約四万人が昼間と夜で入れ替わるということになります。そうになると、区民の殆どが地域内において活動されていることになりました。発生時刻を午後十二時五十分として、皆さんは、全員、本日の研修会場である法照寺様に居合わせたとしてイメージしてください。

どうぞ時間の許す限り、お話し合いをお願いいたします。

#### グループワーク後（参加者の問いかけに答える場面）

・本日の想定は、十二時五十分でした。当然明るい時間帯であり、誰もが状況は目視できます。しかし、神戸のように、午前五時四十六分としたらどうか。多くの人々がまだ布団の中で就寝中だったらどうなりますか。神戸での死者の九割の人が家屋の倒壊によって亡くなりました。私たちがいざという時に、どれだけ突然の事態を認識、把握することができるか。時間帯が明るいか暗いかということは非常に大きな問題となります。判定会議での最悪の想定は冬の夕方の方の六時としています。その時間帯はすでに外は暗く、ライフラインがすべて停止。明かりも消えてしまい、手探り状態の中でこの恐怖を感じるわけです。皆さんはどのように対処されたでしょうか。

・「直ちに帰宅をする」件に関しては、まず、我が自身自身のパニック発作を克服して、精神的に元に戻らなければ次の行動に移れません。ですから直ちに帰宅することは不可能であり、これは相当時間が経ってからです。

・衝撃によってパニック状態になるといわれています。物の転倒ばかりでなく、人も飛ばされてしまうかも知れないという事態に幼い子供は特に注意が必要であるといわれています。その瞬間、まず我が身の安全を守ることが肝心であり、まず身体的に頭部を守ることが原則であります。頭部を覆うものがなければ、両手で押さえる際には、決して手のひら側、動脈を表に向けないことを日頃から認識すべきです。

・実際に大事故と大災害の相違は、この表にしてみるとよく分かるように、例えば事故の場合、被害は面積的には点の範囲に対して、災害時には広範囲になります。時間の経過も、地震の揺れは数秒から何十秒間かも知れませんが、被害は日数単位、復旧・復興にはそれ以上の長期に亘ることが予想されます。さらに負傷者に関しても、五十人以上が事故の範疇とするが、実際の災害時にはその全ての地域で全てが崩壊、混乱することにより、およそ推定することは不可能です。負傷者の医療機関への搬送も当然遅延します。事故の場合には障害無く直近の病院へ搬送できるも、災害の場合は直近の病院どころか、救急車が着かず搬送が出来ないことも考えられます。最終的な治療への過程として、救命救急、高度救命医療というプロセスをクリアすることができるでしょうか。

・今、言われた通り、最初の揺れから建物などの窓ガラスの破片が降る中を、まさか座布団を被って帰ろうとする人はいないと思いますが、周囲の状況を確認した上で、次の行動を開始して下さい。安易な行動が被害を拡大させるかもしれません。防災というのは、被害を無くするのではなく、拡大させないということが重要なポイントです。

・自分達が自立できる形の中で、初期調査ができませんと、情報も正確に外に出せませんので、まず情報の一元化を図り、メディアを頼りにするのではなくて、お互いに情報を共有していただきたいということです。

・誰でも暇で手が空いた者が行くのでは駄目なのです。日頃からこの人にはこういうことが頼める、あの人であればこれができるというお互いの信頼のおけるネットワークづくり、さらに体系的な實際行動のマニュアルを作ってもらいたいです。

・本宗教師としては、普段からそういう意識を持っていただきたいのですが、日頃からそのような認識を切らせないように保ち続けることは大変なことで、ある意味では今、宗務院福祉共済課の橋本課長と私だけが四六時中、三五日、緊張状態にある（笑）と言っても過言ではないと思います。

・宗教的取組みとして、私たちがやらなければならない。これは皆さんもやらなきゃならないという意識は一〇〇%

あるはずですが。でもその、やり方と内容については、よく考えなければいけない。その使命感というか、教師としての立場の在り方を是非大事にしていたら、その力を二倍にも三倍にも出来るような体制作りを、是非ともお願いをしたいと同時に、やはり継続する。やり続けるということが大変なのです。

・果たして宗教色を出さないで、まず人間として体当たりをしていくことがいいのか、これは、その時のケースバイケースです。ですから、最初から袈裟を着け数珠を持つて行くということがベターではありません。神戸の人達も、私が僧侶だと分かるまでだいぶ時間がかかったのです。そういう意味では僧侶としての立場で現地に入られ遺体のご供養等依頼されておりました。同じ被災地に立ったスタンスの違いが支援内容の違いとして現れたのです。

・今年も一月十七日、十三年目の追悼式を開催した際、会場におられる参列者は、たぶん九九%他宗教他宗派の人々です。でも、アースが来て、お経を上げてくれるのならばと、この日ばかりはたとえ教義は違っても皆同じ気持ちになれるのです。ですから一月十七日当日は、アースでは「喪と復興」の作業と位置づけ、未来に向かって共に生きる布教教化の場としています。

本日は、直下型地震が予見される東京の一角に於かれました、研修を積んでいただきました。少しでも被害が拡大しないように、地域において僧侶として、一市民として、日頃の防災まちづくりを目指し、安全、安心な市民社会が実現できるようにご尽力お願い申し上げます。以上でございます。(拍手)